

ポー・カレン語の使役と逆使役

加藤 昌彦

1. ポー・カレン語の概要

ポー・カレン語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である (Matisoff 1991, 2000 など参照)。Kato (2009b) に示したように, ポー・カレン語には表 1 に示すような方言群がある。ポー・カレン語諸方言の詳細な特徴に関しては, Kato (1995), Phillips (2000), Dawkins and Phillips (2009a, b) などを参照されたい。本稿では, 東部ポー・カレン (Eastern Pwo Karen) に属するパアン (Hpa-an) 方言を扱う。以下, 単にポー・カレン語と言えばパアン方言を指す。

表 1 ポー・カレン語諸方言

方言群	分布地域
Western Pwo Karen	Irrawaddy Delta, Myanmar
Htoklibang Pwo Karen	Bilin Township, Mon State, Myanmar
Eastern Pwo Karen	Karen State, Myanmar; Mon State, Myanmar; Tennasserim Division, Myanmar; West-Central Thailand
Northern Pwo Karen	Northwestern Thailand

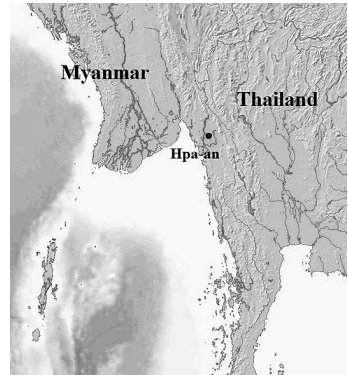


図 1 パアンの位置

ポー・カレン語の単語は, 名詞, 動詞, 副詞, 助詞, 感嘆詞の 5 つの語類に分類することができる (加藤 2004, 2008)。この言語は分析的 (analytic) な特徴を持ち, 基本語順は SVO である (Kato 2003, 2017 など)。屈折は存在しないと言ってもよく, 接辞による派生も数が限られている¹。一個の節は図 2 に示すような要素で構成される。加藤 (2013) で述べたとおり, 動詞はポー・カレン語の節における必須要素である²。

¹ 加藤 (2004) は, 10 個の派生接辞を挙げている。

² ただし, 常に容認されるわけではないが, 加藤 (2013) で議論したように, 指差し行為を伴ったときなどに述語が名詞のみからなる文が使われる場合があることも確かである。これを根拠としてポー・カレン語に名詞述語文の存在を認めてよいかどうかは今後も検討の余地がある。

(名詞₁) (Vptc) 動詞 (Vptc) (名詞₂) (名詞₃) (副詞的要素)

図2 ポー・カレン語の節の基本構造

この図において「名詞₁」は主語であり、「名詞₂」と「名詞₃」は目的語である。二つの目的語が現れるのは、/phîlân/「与える」などの二重他動詞（ditransitive verb）のときである。授受にかかわる二重他動詞の場合、「名詞₂」が受領者（recipient）、「名詞₃」が対象（theme）を表す。「動詞」の部分には連結型の動詞連続が現れることもある。「Vptc」は動詞助詞（verb particle）で、動詞の前に現れるものと後に現れるものとがあり、それぞれ同時に複数個現れることができる。動詞と動詞助詞からなる部分を「動詞複合体」と呼ぶ。「副詞的要素」には、副詞、側置助詞句、副助詞³を含む。この他、節頭に名詞の一部や副詞が現れることや、副詞的要素の後にもう1個の動詞が現れること（分離型動詞連続）もあるが、説明の煩雑化を避けるため、ここでは省略する。(1)に例を示す。

(1)	θàʔwà	mə	ʔán	bá	mì	ʔáʔá	ló	yéin	phèn	cī
	(人名)	IRR	食べる	(機会)	ご飯	沢山	LOC	家	中	も
	名詞 ₁	Vptc	動詞	Vptc	名詞 ₂	副詞	側置助詞句		副助詞	
	動詞複合体					副詞的要素				

ターワーは家でたくさんご飯を食べられることにもなろう。

ポー・カレン語の文をボイスの観点から見ると、少なくとも使役構文と逆使役構文を設定することができる（加藤 2013 参照）。他にも適用構文（Peterson 2007 参照）、再帰構文、相互構文といった構文を認めることができる可能性もあるが、本稿では、主語の変更を伴うという点で重要な、使役構文と逆使役構文を扱う。ポー・カレン語における項の変更を伴う統語的操作の全般についてはKato (2009a)を参照されたい。本稿の目的は、ポー・カレン語における使役構文と逆使役構文の用法を概観することである。以下、第2節で使役構文を扱い、第3節では逆使役構文を扱う。さらに第4節では、ポー・カレン語の自他対応を観察し、この言語では自他対応において自動詞から他動詞を派生する傾向が強いことを見る。

³ 助詞には、側置助詞（adpositional particle）、従属節助詞（subordinate clause particle）、一般助詞（general particle）、名詞修飾助詞（noun modifying particle）、動詞助詞（verb particle）、副助詞（adverbial particle）、文助詞（sentence particle）の7種類を認めることができる（加藤 2004）。

2. 使役構文

以下の記述は Kato (1999) に基づく。ポー・カレン語の使役を表す構文には TYPE 1 と TYPE 2 の 2 つがある。ここでは、使役行為を表す要素を使役要素、被使役行為を表す動詞を被使役動詞と呼ぶことにする。(2) に図示するように、TYPE 1 では、使役要素と被使役動詞が並置され、これ全体が動詞複合体となり、その後に目的語として被使役者を表す名詞句が置かれる（ただし、被使役動詞が三項動詞の場合には側置助詞を伴って現れる）。TYPE 2 では、使役要素が補文を取り、被使役者を表す名詞句⁴と被使役動詞が補文の中に現れる。TYPE 1 の例を (3) に、TYPE 2 の例を (4) に示す。それぞれの詳細は 2.1 と 2.2 で述べる。

(2) TYPE 1 : [動詞複合体 使役要素 被使役動詞] 被使役者

TYPE 2 : 使役要素 [補文 被使役者 被使役動詞]

(3) jə [dà lì] ʔəwê

1SG CAUS 行く 3SG

私は彼に行かせた。

(4) jə ʔánmân [ʔəwê lì]

1SG 命ずる 3SG 行く

私は彼に行くことを命じた。

2.1. TYPE 1

TYPE 1 では、使役要素と被使役動詞が並置される。この 2 つの間にはいかなる要素も介在できない。このタイプの使役構文は、「動詞複合体の目的語が、動詞複合体を構成するいずれかの動詞の論理的主語と同一指示である」という特徴によって定義することができる。TYPE 1 は 2 種類に分けることができる。一つは、使役要素として動詞助詞が用いられる場合 (2.1.1) であり、もう一つは、使役要素として動詞が用いられる場合 (2.1.2) である。

2.1.1. 使役要素として使役助詞を用いる場合

使役を表す動詞助詞をここでは「使役助詞」と呼ぶ。代表的な使役助詞には dà がある。これは正真正銘の助詞である。なぜなら、(a) 単独で使われることがない、(b) 対応する動詞がない、(c) 弱化して軽声音節の də となることがある（すなわち音韻的に後続する動詞への従属度が高まっている）、という特徴を持つか

⁴ 被使役者を表す名詞句は、表面上、使役要素の目的語であるかのようにも見えるが、統語的には被使役動詞の主語である。その根拠については Kato (1999) で詳細に論じたので、参照していただきたい。

らである。

使役要素として使役助詞を用いたとき、被使役者の現れ方は次のとおりである。(5) は被使役動詞が自動詞の例、(6) は単一他動詞 (monotransitive verb) の例である。いずれの場合も、被使役者は動詞複合体の目的語として現れる。(6) から分かるように、被使役動詞が単一他動詞の場合、被使役者を表す名詞は「名詞₂」として現れ、被使役動詞の目的語は「名詞₃」として現れる。

- (5) jə dà klí ʔəwê
1SG CAUS 走る 3SG

私は彼に走らせた。

- (6) jə dà ʔán ʔəwê m̀ì
1SG CAUS 食べる 3SG ご飯

私は彼にご飯を食べさせた。

被使役動詞が二重他動詞 (ditransitive verb) の場合には、被使役者は共同者や道具を表す側置助詞 *dē* に導かれて現れる。

- (7) jə dà phílân ʔəwê láíʔàu dē jə m̄
1SG CAUS 与える 3SG 本 COM 1SG 母

私は自分の母に頼んで彼に本を渡してもらった。

Comrie (1976) が指摘したように、被使役動詞が二重他動詞であるとき被使役者が斜格名詞句で現れる現象は、世界の様々な言語に見られる。

使役助詞には、*dà* の他に、*mà* (「する、作る」を意味する動詞に由来)、*phílân* (「与える」を意味する動詞に由来)、*kò* (「呼ぶ」を意味する動詞に由来)、*l̄* (「語る」を意味する動詞に由来) がある。(8) から (11) に例を示す。

- (8) a. jə mà θī ʔəwê
1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を殺した。

- b. jə mà pjò ʔəwê m̀ì
1SG CAUS 吐く 3SG ご飯

私は彼にご飯を吐かせた。

- (9) a. jə phɪlân mî ʔəwê
 1SG CAUS 寝る 3SG
 私は彼を寝させてやった。
- b. jə phɪlân pō ʔəwê láɪʔàu
 1SG CAUS 読む 3SG 本
 私は彼に本を読ませてやった。

- (10) a. jə kò mî ʔəwê
 1SG CAUS 寝る 3SG
 私は彼を呼んで泊ませた。
- b. jə kò ʔán ʔəwê mî
 1SG CAUS 食べる 3SG ご飯
 私は彼を呼んでご馳走した。

- (11) a. jə lə nī ʔəwê
 1SG CAUS 笑う 3SG
 私は彼を笑わせた。
- b. jə lə ɣən ʔəwê pòun
 1SG CAUS 聞こえる 3SG 昔話
 私は彼に昔話を語って聞かせた。

これらは動詞に由来するものであり、その点で、2.1.2で見る「使役要素として一般動詞を用いる場合」と共通する。本稿で「一般動詞」とは、使役助詞として文法化されていない動詞を指す。しかし、(8)～(11)の各bに示したような他動詞は、一般動詞を用いた使役の場合には現れない。例えば、使役動詞として一般動詞である dú「叩く」を用いた(12)は非文である。この違いをもって、上記4形式を一般動詞とは考えず、使役助詞として文法化していると見なす。

- (12) *jə dú pjò ʔəwê mî
 1SG 叩く 吐く 3SG ご飯

意図した意味：私は彼を叩いてご飯を吐かせた。

使役助詞の使い分けに大きく関わる要素は、被使役動詞の意志性と被使役者の有生性である。したがって、以下では特にこの2点に着目して使役助詞を観察する。

2.1.1.1. dà

dàuあるいはdəとも発音される。スゴー・カレン語の使役助詞 *duw?* や西部ポー・カレン語 (Western Pwo Karen) の *ḍəw?* との対応から考えると, *dà*, *dàu*, *də* のうち *dàu* が最も古い発音であると考えられるが, *dà* と発音されることが最も多い。Jenny (2015: 170) は, *dà* と同源のカヤー・リー語 (Kayah Li) の使役形式 *dá* (‘give’の意味も持つ; Solnit 1997: 314) および上記スゴー・カレン語の *duw?* がチベット・ビルマ祖語の **ter*/**s-ter* ‘give, CAUSATIVE’ (Matisoff 2003: 399, 615) に由来するとする。カヤー・リー語では動詞としても用いられるようであるが, ポー・カレン語とスゴー・カレン語では動詞としての用法は存在しない。

dà は次のように, 意志動詞とも無意志動詞とも共起することができる。

(13) *jə dà phû ʔəwê*

1SG CAUS 跳ぶ 3SG

私は彼にジャンプさせた。

(14) *jə dà θi ʔəwê*

1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を死なせた。

上例の被使役者は有生物であるが, 無生物の被使役者も可能である。

(15) *jə dà ʔàʔòn ʔéin*

1SG CAUS 壊れる 家

私は家を壊した。

2.1.1.2. mà

「する」「作る」を表す動詞 *mà* に由来する。*mà* は, (16) のように無意志動詞とは共起するが, (17) に示すように, 意志動詞とは共起しない。

(16) *jə mà θi ʔəwê*

1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を殺した。

(17) **jə mà phû ʔəwê*

1SG CAUS 跳ぶ 3SG

意図した意味：私は彼を跳ばせた。

被使役者は、上掲 (16) のように有生物であっても、下掲 (18) のように無生物であってもよい。

- (18) jə mà ɣàɣòn ɣéin
 1SG CAUS 壊れる 家
 私は家を壊した。

dà と mà は無意志動詞と共起するという点で共通する。同じ無意志動詞に dà と mà を共起させることが可能である。例えば、(14) と (16), (15) と (18) を見ていただきたい。このような場合に二つの形式の間に見られる大きな違いは、dà は使役が間接的であるのに対して mà は直接的であるという違いである。(18) は直接的に家に打撃を加えて破壊する様子を表す。一方、dà を用いた (15) は、風雨にさらして自然に壊れるのを待つような状況を表す。同様に、(16) は直接手を下して殺すことを表すが、(14) は放置して食事を与えずに殺すような状況を表す。

第3節で見るように、ポー・カレン語には、動作対象に変化を生じさせる典型的な他動的状況を表す他動詞が少ない。そこで、そのような状況を表すとき、自動詞にこの使役助詞 mà を用いるのが一般的である。例えば、「殺す」を表す動詞は存在せず、「殺す」という状況を表すには、mà θi 「殺す」を使って迂言的に表現する必要がある。

2.1.1.3. phılân (phılân)

「与える」の意を表す動詞 phılân に由来する。phılân とも言う。この使役助詞は裨益的な使役を表す。意志動詞と無意志動詞のいずれとも共起する。(19) は意志動詞と共起した例、(20) は無意志動詞と共起した例である。

- (19) jə phılân klí ʔəwê
 1SG CAUS 走る 3SG
 私は彼に走らせてやった。
- (20) jə phılân mên thán ʔəwê
 1SG CAUS 生きた up 3SG
 私は彼を生き返らせてやった。

上掲 (19) と (20) は被使役者が生物である例であるが、被使役者は次の (21) のように無生物であってもよい。ここで被使役者は dàuphòn 「部屋」である。

- (21) jə phıl̥lân phàn thán dàuphàn (ʔəwê ʔəɣān)
 1SG CAUS 明るい up 部屋 3SG ため

私は（彼のために）部屋を明るくしてやった。

ただし、(21) のように被使役者が無生物の場合には、被使役者とは別に有生物の受益者の存在が前提となる状況しか表すことができない。この文では、「彼」が受益者に相当する。

2.1.1.4. kò

「呼ぶ」の意を表す動詞 kò に由来する。「呼び寄せて～させる」「呼びかけて～させる」という意味を表す。意志動詞と無意志動詞のいずれとも共起する。(22) が意志動詞の例、(23) が無意志動詞の例である。

- (22) jə θò kò mī jə
 1SG 友人 CAUS 寝る 1SG

友人が私に泊まりにくるよう言った。

- (23) jə kò nó thán ʔəwê
 1SG CAUS 目覚める up 3SG

私は彼に声をかけて目覚めさせた。

被使役者は人間でなければならない。したがって (24) は可だが (25) は容認されない。

- (24) jə kò ɣê thán jə phú
 1SG CAUS 来る up 1SG 子

私は子供を（二階に）呼び寄せた。

- (25) *jə kò ɣê thán jə thwí
 1SG CAUS 来る up 1SG 犬

意図した意味：私は自分の犬を（二階に）呼び寄せた。

2.1.1.5. l̥ə

「語る、話す」の意を表す動詞 l̥ə に由来する。話しかけて何らかの状況を引き起こすことを表す。(26) に示したように無意志動詞とは共起するが、(27) のように、意志動詞とは共起しない。

- (26) ʔəwê lə̌ nī̌ jə̌
 3SG CAUS 笑う 1SG

彼は私を笑わせた。

- (27) *ʔəwê lə̌ klí̌ jə̌
 3SG CAUS 走る 1SG

意図した意味：私は彼に話しかけて走らせた。

被使役者は、人間を含む動物でなければならない。したがって、(28) は可能であるが、(29) は容認されない。無生物に語りかけて何らかの事象を生起させることは常識的には不可能だからであろう。

- (28) jə̌ lə̌ ɣə̌n jə̌ thwí̌
 1SG CAUS 聞こえる 1SG 犬

私は自分の犬に言って聞かせた。

- (29) *jə̌ lə̌ ɣàɣò̌n jə̌ ɣé̌in
 1SG CAUS 壊れる 1SG 家

意図した意味：私は家に話しかけて破壊した。

2.1.2. 使役要素として一般動詞を用いる場合

連結型動詞連続（加藤 1998, Kato 2009a を参照されたい）における「主語非同一型」では、第一動詞（V1）が他動詞、第二動詞（V2）が自動詞であり、第一動詞の O が第二動詞の S と同一指示になる。このようなタイプの動詞連続は TYPE 1 の定義に当てはまるので使役構文と見なすことができ、V1 が使役要素、V2 が被使役動詞に該当する。被使役者は (30) のように有生物であっても、(31) のように無生物であってもよい。

- (30) jə̌ chə̌ θí̌ ʔəwê
 1SG 刺す 死ぬ 3SG

私は彼を刺し殺した。

- (31) jə̌ ʔá̌in blə̌ kú̌
 1SG かむ 砕ける 菓子

私は菓子をかみくだいた。

被使役動詞である V2 は常に無意志動詞でなければならない、意志動詞を用いる

ことはできない。したがって、次の (32) は非文法的である。

- (32) *jə dú chínnàn ʔəwê
 1SG 叩く 座る 3SG

意図した意味：私は彼を叩いて座らせた。

2.2. TYPE 2

TYPE 2 の使役構文は、「目的語の位置に現れる補文に現実法 (realis modality) と非現実法 (irrealis modality) の対立が生じない文」と定義することができる。通常の補文は、例えば動詞 dá「見える」が目的語位置に取る補文のように、現実・非現実の対立を示す。(33a) が現実法の例、(33b) が非現実法の例である。

- (33) a. jə dá [ʔəwê klí] b. jə dá [ʔəwê mə klí]
 1SG 見える 3SG 走る 1SG 見える 3SG IRR 走る
 私は彼が走っているのを見た。 私は彼が走ろうとするのを見た。

しかし、TYPE 2 の使役構文の補文には、(34b) に示すように、irrealis marker の mə が現れない。

- (34) a. jə ʔánnmân [ʔəwê klí] b. *jə ʔánnmân [ʔəwê mə klí]
 1SG 命じる 3SG 走る 1SG 命じる 3SG IRR 走る
 私は彼に走るよう命じた。

このような特徴を有する動詞には、ʔánnmân「命じる」、plètò「許す」、phílân「与える」の3つがある。TYPE 1 と同じく、TYPE 2 においても被使役動詞の意志性と被使役者の有生性が容認度に大きく関わる。したがって、以下では特にこの2点に着目して各々の動詞を観察する。

2.2.1. ʔánnmân

ʔánnmân は「命じる」という意味の動詞である。この動詞が取る補文の動詞は意志動詞でなければならない。したがって、(35) は適格だが、(36) は容認されない。

- (35) jə ʔánnmân ʔəwê chínnàn
 1SG 命じる 3SG 座る

私は彼に座るよう命じた。

- (36) *jə ʔánmêN ʔəwê θi
 1SG 命じる 3SG 死ぬ

意図した意味：私は彼に死ぬよう命じた。

また、被使役者は人間でなければならない。(37) に示すように、有生物であっても、動物では容認されない。

- (37) *jə ʔánmêN jə thwí chinàn
 1SG 命じる 1SG 犬 座る

意図した意味：私は自分の犬に座るよう命じた。

2.2.2. plètò (plè)

plètò は「許す」という意味の動詞である。plè とも言う。この動詞が取る補文の動詞は意志動詞でなければならない。したがって、(38) は適格だが、(39) は容認されない。

- (38) jə plètò ʔəwê chinàn
 1SG 許す 3SG 座る

私は彼に座ることを許可した。

- (39) *jə plètò ʔəwê θi
 1SG 許す 3SG 死ぬ

意図した意味：私は彼に死ぬことを許可した。

また、被使役者は人間でなければならない。(40) に示すように、有生物であっても、動物では容認されない。

- (40) *jə plètò jə thwí chinàn
 1SG 命じる 1SG 犬 座る

意図した意味：私は自分の犬に座ることを許した。

2.2.3. phílân (phlân)

phílân は「与える」という意味の動詞である。phlân とも言う。TYPE 1 で見た使役助詞 phílân と同じく、裨益的な使役を表す。TYPE 1 の phílân は、TYPE 2 の phílân で言い換えられることが多い。例えば、(41a) と (41b) の間にさしたる意味的な差異はない。

(41) a. jə phılân lî ʔəwê [TYPE 1]

1SG CAUS 行く 3SG

私は彼を行かせてやった。

b. jə phılân ʔəwê lî [TYPE 2]

1SG 与える 3SG 行く

私は彼を行かせてやった。

しかし次のような点で、TYPE 2 の phılân は、TYPE 1 の phılân と異なる。まず、TYPE 1 では被使役動詞は意志動詞でも無意志動詞でもあり得たが、TYPE 2 では、被使役動詞は必ず意志動詞でなければならない。そのため、TYPE 1 の例である (42) は容認されるが、同じ状況を表すことを意図した TYPE 2 の (43) は容認されない。

(42) jə phılân xī thán ʔəwê [TYPE 1]

1SG CAUS 美しい up 3SG

私は彼女を（きれいな衣装を着せて）美しくしてやった。

(43) *jə phılân ʔəwê xī thán [TYPE 2]

1SG CAUS 3SG 美しい up

また、ʔánmân や plètò の場合と同様、被使役者は人間でなくてはならない。したがって、TYPE 1 である (44) は容認されるが、同じ状況を表すことを意図した TYPE 2 の (45) は容認されない。

(44) jə phılân jā jə thwí thî [TYPE 1]

1SG CAUS 泳ぐ 3SG 犬 水

私は自分の犬を泳がせてやった。

(45) *jə phılân jə thwí jā thî [TYPE 2]

1SG CAUS 1SG 犬 泳ぐ 水

このように、TYPE 2 の phılân は、TYPE 1 の phılân に比べて、使用上の制限が大きい。しかも、(41b) のような TYPE 2 として成立する文は、(41a) のように、TYPE 1 に言い換えることが可能である。ではなぜ TYPE 2 の phılân が存在するのかという疑問が生じるが、その理由は分からない⁵。

⁵ LaPolla (p.c., 2000 年) によれば、通言語的な文法変化の傾向から見ると、TYPE 2 の phılân のほうが TYPE 1 より古く、TYPE 1 の phılân は TYPE 2 から発生した可能性があるという。もしそうだとすると、TYPE 2 の phılân は歴史的な残存物である可能性がある。

2.3. 使役構文のまとめ

このように、使役構文の適格性には、被使役動詞の意志性と被使役者の種類が条件として関わっている。上で論じてきたことを表2にまとめる。「一」は制限のないことを表す。TYPE 1 には動詞が無意志動詞でなければならないものが多い。しかし、TYPE 2 では動詞は意志動詞でなければならない。この点において、TYPE 1 と TYPE 2 は対照的である。また、TYPE 2 では被使役者が人間でなければならないが、TYPE 1 では被使役者に制限がないものが多い。この点も対照的である。

表2 使役構文が適格となる条件

使役要素の種類	被使役動詞の意志性	被使役者の種類
TYPE 1		
使役助詞 dà	—	—
使役助詞 mà	無意志	—
使役助詞 phĩlân	—	—
使役助詞 kò	—	人間
使役助詞 l̥	無意志	人間を含む動物
一般動詞	無意志	—
TYPE 2		
ʔánm̥ân	意志	人間
pl̥t̥	意志	人間
phĩlân	意志	人間

3. 逆使役構文

ポー・カレン語には逆使役構文（anticausative construction）がある。逆使役構文とは、他動詞文から派生された自動詞文のSが派生元の他動詞文のOに相当し、なおかつ、元の他動詞文のAが標示されないような文である（Dixon and Aikhenvald 2000: 7）。まず (46) に示す他動詞文を見ていただきたい⁶。

(46) ʔəwê pàu thán pàitərân
 3SG 開ける up 窓

彼は窓を開けた。

この文は、動詞助詞 θà によって、(47) に示す自動詞文に変えることができる。

⁶ 動詞 pàu「開ける」は、ほとんどの場合、後に上方向を示す動詞助詞 thán を伴って現れる。thán は速い発話では b́án と発音されることが多い。

- (47) pàitərân pàu thán θà
 窓 開ける up ANTIC
 窓が開いた。

上掲(46)の目的語位置にあった pàitərân が(47)では主語位置にある。また、(47)では(46)の主語である ʔəwê は現れることができない。本稿ではこのように、θà が使われて、他動詞文の O が S として現れた文をポー・カレン語の逆使役構文と定義し、動詞助詞 θà を、逆使役構文を形成する助詞であると見なす。また、動詞に θà が後置された動詞複合体全体を逆使役形と呼ぶ。Kato (2009a) では(47)のような文を middle(中動態)と呼んだ。しかしながら、Dixon and Aikhenvald (2000: 11) が指摘するように、middle と呼ばれる現象は、「恐ろしく多様な意味」(frightening variety of meanings) で用いられる。したがって、ここではよりの確にこの構文の特徴を把握することのできる逆使役構文という用語を使っておきたい。なお、様々な言語の middle と呼ばれる現象については、Kemmer (1993) に詳しい。TB 諸語の middle については LaPolla (1996) を参照されたい。

この動詞助詞 θà は名詞 θà 「心」と同形であり、この名詞に由来すると考えられる。Kato (2009a) で記述したとおり、動詞助詞 θà には次のような再帰の用法も存在する。しかし、再帰の用法では、θà は常に下方への移動を表す動詞助詞 làn と共に現れる。したがって本稿では、再帰の用法の θà は逆使役構文を形成する θà とは別個のものであると見なす。

- (48) ʔəwê ch̀e làn θà
 3SG 刺す down REFL
 彼は自分自身を突き刺した。

逆使役の θà の重要な役割の一つは、自動詞的状况を表す動詞が欠如しているときに、他動詞から自動詞述語を形成することである。ポー・カレン語には、動作対象に変化を生じさせる動作を表す他動詞が少ない。本稿では、以降、このような意味を持つ動詞を達成動詞 (accomplishment verb) と呼ぶことにする。達成動詞が少ないので、動作対象に変化を生じさせる動作の多くは、使役構文を用いて表される。典型的には、2.1.1.2 で扱った使役助詞の mà を使って表現する。例えば、mà θi 「殺す」、mà ʔəyòn 「壊す」、mà khā 「折る」、mà lànthé 「落とす」、mà thé 「切る」、mà gàkhī 「(木を) 倒す」、mà wà 「揺らす」などに見られるとおりである。ところが、逆に、達成動詞のみが存在し、意味的に対応する自動詞が存在しないことがある。そのような場合に、自動詞的状况を表すために使われるのが θà である。これについては既に Kato (2009a) で指摘した。現在のところ、次のようなものが見つかっている。

(49) 達成動詞	逆使役形
pàu thán 「開ける」	→ pàu thán θà 「開 (あ) く」
θàu 「動かす」	→ θàu θà 「移動する」
wái 「ねじる」	→ wái θà 「ねじれる」
?ò 「剥く」	→ ?ò θà 「剥ける」
?ánlè 「変える」	→ ?ánlè θà 「変化する」
khə̀dà 「貼る」	→ khə̀dà θà 「貼りつく」
klò 「はがす」	→ klò θà 「はがれる」
?ánkhwê 「(魚を) 釣る」	→ ?ánkhwê θà 「釣れる」
kə̀thái 「はさむ」	→ kə̀thái θà 「はさまる」
bēin 「(目を) 閉じる」	→ bēin θà 「(目が) 閉じる」
khlēin 「転がす」	→ khlēin θà 「転がる」

こうした動詞と θà の組み合わせは、おそらく、慣用句的に決まっているものである。なぜなら、達成動詞であれば、対応する逆使役形を自由に作れそうなものであるが、実態はそうではないからである。例えば、(50) の ?ánká 「焼く」と (51) の thû 「(筒状に) 巻く」は論理構造に変化を含んでいると思われるけれども、これらの動詞に θà を後置して逆使役構文を作ることはいできない。

- (50) *já ?ánká θà
 魚 焼く ANTIC
 意図した意味：魚が焼けた。

- (51) *khí thû θà
 ござ 巻く ANTIC
 意図した意味：ござが巻いた状態になった。

したがって、(49) に列挙したような用法を、ここでは θà の「イディオム用法」(idiomatic usage) と呼ぶことにしよう。

ところが、?ánká 「焼く」や thû 「巻く」のような達成動詞は、「結果の持続」を表す動詞助詞 wè 「既に～した状態にある；前もって～しておく」が共起したとき、適格な逆使役構文になる。(52) と (53) に示すとおりである。なお、wè と θà の語順は、wè θà でなければならず、θà wè は容認されない。

- (52) já ?ánká wè θà
 魚 焼く RES ANTIC
 魚が焼けている。

- (53) khló thû wè θà
 ござ 巻く RES ANTIC
 ござが巻いてある。

イディオム用法とは別の、逆使役の θà のもう一つの役割は、(52) や (53) のように、結果の持続を表す wè と共に現れて、結果を表す自動詞文を作ることである。他にも例を挙げよう。これらの例文における動詞は、例文の右側に示したとおり、θà のみを後置して逆使役形を作ることができない。しかし、wè が共起すると、逆使役構文が成立するのである。

- (54) mì ʔánphôn wè θà (*ʔánphôn θà)
 ご飯 炊く RES ANTIC
 ご飯が炊いてある。

- (55) phlì cèntháwn wè θà (*cèntháwn θà)
 ひも 結ぶ RES ANTIC
 ひもが結んである。

- (56) châin ʔánchújwà wè θà (*ʔánchújwà θà)
 シャツ 洗う RES ANTIC
 シャツが洗ってある。

- (57) nó thè wè θà (*thè θà)
 草 引き抜く RES ANTIC
 草が引き抜いてある。

- (58) chəphèn kháwn wè θà (*kháwn θà)
 穴 掘る RES ANTIC
 穴が掘ってある。

- (59) láíʔau kòkíθú wè θà (*kòkíθú θà)
 本 隠す RES ANTIC
 本が隠してある。

- (60) châin çân wè θà (*çân θà)
 シャツ 破く RES ANTIC
 布が破いてある。

(61) phlì kwé làn wè θà (*kwé làn θà)

ひも ほどく down RES ANTIC

ひもがほどいてある。

動詞助詞 wè を共起させることによって逆使役構文が成立するのは、達成動詞の場合のみである。(62) に例を示した dú「叩く」のように、論理構造に変化を含まない動詞の場合、wè が共起しても逆使役構文は成立しない。

(62) *cəpwē dú wè θà

机 叩く RES ANTIC

意図した意味：机を既に叩いてある。

このように、達成動詞であれば、イディオム用法が可能ではなくても、逆使役形を wè と共に用いることにより、適格な逆使役構文を作ることが可能になるのである。この統語的操作は極めて生産的である。

動詞助詞 wè を用いた逆使役構文においては、逆使役形が表す状況を引き起こした動作が存在することが含意 (entail) される。そのことは、例文 (60) の cān「破く」や (61) の kwé làn「ほどく」のように、意味的に対応する自動詞が存在する動詞で検証すると明らかである。(63) と (64) は、それぞれ (60) と (61) に対応する、自動詞を使った文である⁷。

(63) chāin já wè

シャツ 破ける RES

シャツが破けている。

(64) phlì lānkwé wè

ひも ほどける RES

ひもがほどけている。

例文 (60) と (63) の違いは、逆使役構文を用いた (60) が表す状況においては、「破ける」という変化が何らかの動作の結果として生じたことが含意されるのに対し、自動詞文の (63) では、そのような動作は含意されないことである。同様に、(61) と (64) の違いも、(61) では動作の存在が含意されるのに対して (64) では含意されないことにある。このように、wè θà を使った文においては、動作の存在が含意される。一方、(49) に列挙したイディオム用法の逆使役形を用いた逆使役構文

⁷ (63)(64) のような無意志的な自動詞に後置された wè は、wè θà と言うこともある。例えば (63) は chāin já wè θà としてもよい。本来、θà は自動詞と共起しないので、これは奇妙である。筆者はこれを、逆受動構文の wè θà からの類推で生じた用法なのだと考える。

においては、動作がまったく含意されない。したがって、(65) は窓がひとりでに開いたことを表すのである。

- (65) pàitərân pàu thán θà (=47)
 窓 開ける up ANTIC
 窓が開いた。

しかし、これに wè を入れた (66) では、動作が存在するか否かは曖昧になる。この文は、何らかの動作によって窓が開いた場合にも、ひとりでに窓が開いた場合にも、用いることができるのである。

- (66) pàitərân pàu thán wè θà
 窓 開ける up RES ANTIC
 窓が開いている。

逆使役形がもしイディオム用法でのみ使われるのであれば、この言語における逆使役構文の重要度はそれほど高くないと思われる。イディオム用法の逆使役構文は生産性に欠けるからである。しかし、動詞助詞 wè を伴った逆使役構文の生産性は非常に高い。その分、逆使役構文の重要度が高まっていると言えよう。筆者は、Kato (2009a) を書いた段階ではこのことに気づいていなかった。

逆使役構文を使用する意義は、被動者 (patient) の意味役割を持つ名詞を主語にすることによって、被動者を目立たせることができるということである。(54) が表すのと似た意味は、次の (67) によっても表すことができる⁸。

- (67) jə ʔánphôn thá wè mǐ
 1SG 炊く (保持) RES ご飯
 私はご飯を炊いておいた。

例文 (54) と (67) の違いは視点の置かれ方にある。(54) では視点 (viewpoint) が被動者である「ご飯」に向いているのに対し、(67) では視点はどちらかといえば動作主である「私」に向けられている。逆使役構文が結果の持続を表す動詞助詞 wè を伴ったときに生産性が高まる原因も、このことに関連していると思われる。動作の結果は被動者に残るものであるから、結果を表す形式が使われると、被動者に視点が向きやすくなる。そのために、被動者を表す名詞句を主語として文を作る要請が生じるのではないか。その要請に応えるという点で、逆使役構文の存在は非常に重要である。

⁸ 意志動詞に wè が後置されるとき、この例文のように、保持を表す動詞助詞 thá が共起することが多い。この助詞はビルマ語の補助動詞 thá「～しておく」の借用である可能性がある。

視点ということに関連した現象を、この節の最後に指摘しておきたい。面白いことに、使役助詞や動詞連続によって自動詞から作られた派生的な他動詞述語が、逆使役によってもう一度、自動詞述語になることがある。(68) から (70) に示した例がそうである。例えば (68) では、自動詞 *θi* 「死ぬ」が使役助詞 *mà* によって他動詞述語化され、さらにそれが逆使役形を用いることで自動詞述語化しているのである。

- (68) *chân mà θi wè θà*
 鶏 CAUS 死ぬ RES ANTIC
 鶏は殺してある。

- (69) *θên khà bài wè θà*
 おかず 覆う 塞がる RES ANTIC
 おかずは覆ってある。

- (70) *lé bò khā wè θà*
 棒 打撃を加える 折れる RES ANTIC
 棒が折ってある。

派生的な他動詞述語をわざわざ自動詞述語に転換することの意義は、主語として現れた被動作者に視点を置きながらも、同時に動作者の存在を示すことができるということである。例えば (68) は、単純に *θi wè* 「死んでいる」というのと違って、鶏を殺した動作者がいることを表すことができるのである。

4. 使役と逆使役の分布

ここでは、パルデシ・桐生・ナロック (2015) に所収のチベット・ビルマ系言語に関わる 4 つの論文 (桐生 2015, 松瀬 2015, 大西 2015, 白井 2015) にならって、Haspelmath (1993) の動詞リストがポー・カレン語でどのように表現されるかを見てみる。Haspelmath は 21 言語における 31 対の inchoative/causative verb pairs⁹ を調べ、使役化傾向の強いものから逆使役化傾向の強いものへと並べた表を示している (Haspelmath 1993: 104 の Table 4)。これに基づいてポー・カレン語の対応する形式を示したのが表 3 である。Haspelmath は verb pair という用語を使っ

⁹ Haspelmath (1993: 90) は、inchoative/causative verb pair を次のように定義する。“An inchoative/causative verb pair is defined semantically: it is a pair of verbs which express the same basic situation (generally a change of state, more rarely a going-on) and differ only in that the causative verb meaning includes an agent participant who causes the situation, whereas the inchoative verb meaning excludes a causing agent and presents the situation as occurring spontaneously.” 日本語の例を挙げれば、「壊れる」が inchoative verb であり、それに意味的に対応する「壊す」が causative verb である。

ているが、対をなす動詞相互の対応関係は、屈折的・派生的・統語的を問わないとしている（Haspelmath 1993: 92）。したがって、ポー・カレン語の使役化と逆使役化はどちらも形態論ではなく統語論レベルの現象であるが、Haspelmath の提案した枠組みの中で扱うことに問題はない。

表3 Haspelmath (1993) の31動詞対に対応するポー・カレン語形式

	INCHOATIVE	CAUSATIVE	
1. boil	khū thán	dòn	S
2. freeze	khúlón	mà khúlón	C
3. dry	xâin	mà xâin	C
4. wake up	nó thán	mà nó thán	C
5. go out/put out	cáin thán (出る) lànphái (消える)	thàu thán (出す) mà lànphái (消す)	S C
6. sink	lànben	bèn	S
7. learn/teach	màlú	màlú	L
8. melt	phlī	mà phlī	C
9. stop	pətháu	mà pətháu	C
10. turn	?ùtərai	mà ?ùtərai	C
11. dissolve	phlī	mà phlī	C
12. burn	khūyú	mà khūyú	C
13. destroy	yàyòn	mà yàyòn	C
14. fill	xwè	mà xwè	C
15. finish	yòn	mà yòn	C
16. begin	tài thán	tài thán	L
17. spread	lē thán	mà lē thán	C
18. roll	khlēin θà	khlēin	A
19. develop	dú thán	mà dú thán	C
20. get lost/lose	làn mā	mà làn mā	C
21. rise/raise	thán	bò thán	C
22. improve	yì thán	mà yì thán	C
23. rock	wàthú	mà wàthú	C
24. connect	bàu	thò bàu	C
25. change	?ánlè θà	?ánlè	A

26. gather	kòun	pəkòun	S
27. open	pàu thán thà	pàu thán	A
28. break	yà yòn	mà yà yòn	C
29. close	bài	khà bài	C
30. split	théphà	mà théphà	C
31. die/kill	θi	mà θi	C

A = anticausative alternation; C = causative alternation; E = equipollent alternation; L = labile alternation; S = suppletive alternation

表の右端に示した略号は派生の種類を表している。その意味は表の下に記したとおりである。Hapelmath (1993) の inchoative verb を自動詞, causative verb を他動詞と簡便に呼び替えると, A は他動詞から自動詞が派生されるもの, C は自動詞から他動詞が派生されるもの, E は双方が別個の同一形式から派生されるもの, L は同形の動詞が使われるもの, S は派生関係のない異なる動詞が使われるものである。ポー・カレン語には E に相当する対は存在しない。

この表から, ポー・カレン語では, 他動詞的状況を表すのに動詞助詞 mà を用いた TYPE 1 の使役構文が多く使われることが分かる。すなわち, causative alternation が多い。使役化の傾向が強い事実は, 桐生 (2015) のメチェ語, 松瀬 (2015) のネワール語, 大西 (2015) のラワン語, 白井 (2015) のギャロン語と共通している。一方で, 31 対のうち 3 つのケースで anticausative alternation が使われることにも注目すべきである。Kato (2009a) で同様のことを指摘したように, 隣接するチベット・ビルマ系言語であり, 現在最もポー・カレン語との接触の多い言語であるビルマ語には, anticausative alternation が存在しないのである。

5. まとめ

本稿では, ポー・カレン語のボイス現象において重要な使役構文と逆使役構文の用法を見てきた。使役構文においては, 被使役動詞の意志性と被使役者の有生性が文の容認度に大きく関わっていることを見た。また, 逆使役構文については, この構文が結果の持続を表す動詞助詞を伴ったときに生産性が高まることを見た。これまで筆者は, ポー・カレン語における使役構文の重要性については何度も述べてきた。一方で, 逆使役構文については, 既にその存在を指摘して記述も行ってはいたが,それほど重要な現象であるとは認識していなかった。本稿では, ポー・カレン語における逆使役構文の重要性を指摘した。そして最後に, Haspelmath (1993) の動詞リストに基づいて, ポー・カレン語が causative alternation の優勢な言語であることを指摘した。

略号

ANTIC	逆使役	SG	単数
CAUS	使役助詞	Vptc	動詞助詞
COM	共同者または道具	1	一人称
IRR	非現実法	2	二人称
REFL	再帰	3	三人称
RES	結果の持続		

転写に用いる記号

子音音素には /p, θ [θ~t], t, c [tɕ], k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, d, ɕ, x, h, ɣ, ʋ, m, n, (ɲ), (ŋ), ɳ, w, j, l, (r)/ がある。括弧でくくったものは主に借用語に現れる。韻母には /i [ɿ], i, ɯ, i [ɪ], u, e, ə, o, ɛ, a, ɔ, ai, au, əŋ, aŋ [ǎŋ], oŋ, eɪŋ [eɪŋ~eɪ], əwɪŋ [əwɪŋ~əwɪ], oʊŋ [oʊŋ~oʊ], aɪŋ/ がある。また、声調には、/á/ [55], /ǎ/ [33~334], /à/ [11], /â/ [51] がある。絶対語末以外の環境には軽声音節 (atonic syllable) も現れる。軽声音節に現れる韻母は /ə/ のみであり、声調符号を付さないことでこれを表す。

筆者はこれまで、音素 /i/ を /ɪ/ と表記してきた。ところが、/ɪ/ を用いると、声調符号を付けたときに /i/ との区別が付きにくい。例えば、/ɪ/ と /í/ を比較していただきたい。さらに、発音記号フォントによっては、斜字体のときに /ɪ/ と /í/ の区別がほとんどなくなってしまうことも分かってきた。そこで本稿では、従来用いてきた /ɪ/ の代わりに /i/ を用いる。

本研究のデータ

本稿で扱ったデータはすべて筆者自身が 1994 年から続けている実地調査で収集したものである。使役および逆使役については、母語話者として特に Saw Hla Chit および Saw Thurein の協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

参考文献

- Comrie, Bernard. 1976. "The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences". (In) Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics, Vol 6: The Grammar of Causative Constructions*, 261–312. New York: Academic Press.
- Dawkins, Erin and Audra Phillips. 2009a. *A Sociolinguistic Survey of Pwo Karen in Northern Thailand*. Chaing Mai: Linguistic Department, Payap University.
- Dawkins, Erin and Audra Phillips. 2009b. *An Investigation of Intelligibility Between West-Central Thailand Pwo Karen and Northern Pwo Karen*. Chaing Mai: Linguistic Department, Payap University.

- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) 2000. *Changing Valency: Case studies in transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 1993. "More on the typology of inchoative/causative verb alternations". In Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87–120. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Jenny, Mathias. 2015. "The far west of Southeast Asia: 'Give' and 'get' in the languages of Myanmar". In N. J. Enfield and Bernard Comrie (eds.) *Languages of Mainland Southeast Asia*, 156–208. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Kato, Atsuhiko. 1995. "The phonological systems of three Pwo Karen dialects". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 18.1, 63–103.
- 加藤昌彦. 1998. 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113, 31–61.
- Kato, Atsuhiko. 1999. "Two types of causative construction in Pwo Karen". In Tadahiko Shintani (ed.) *Linguistic & Anthropological Study on the Shan Culture Area*, 55–93. Tokyo: ILCAA.
- Kato, Atsuhiko. 2003. "Pwo Karen". In Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 632–648. London and New York: Routledge.
- 加藤昌彦. 2004. 「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文.
- 加藤昌彦. 2008. 「ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か？」『アジア・アフリカの言語と言語学』3, 77–95.
- Kato, Atsuhiko. 2009a. "Valence-changing particles in Pwo Karen". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 32.2, 71–102.
- Kato, Atsuhiko. 2009b. "A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms". *Asian and African Languages and Linguistics* 4, 169–218.
- 加藤昌彦. 2013. 「ポー・カレン語の文の分類」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 81–114. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kato, Atsuhiko. 2017. "Pwo Karen". In Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages (2nd Edition)*, 942–958. London and New York: Routledge.
- Kemmer, Suzanne. 1993. *The Middle Voice*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 桐生和幸. 2015. 「メチェ語の使役動詞の形態的特徴」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 239–255. 東京：くろしお出版.
- LaPolla, Randy J. 1996. "Middle voice marking in Tibeto-Burman". *Pan-Asian Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics, Vol. V, 1940–1954*. Mahidol University.
- Matisoff, James A. 1991. "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects". *Annual Review of Anthropology* 20, 469–504.
- Matisoff, James A. 2000. "On the uselessness of glottochronology for the subgrouping of Tibeto-Burman". In Colin Renfrew, April McMahon, and Larry Trask (eds.) *Time Depth in Historical Linguistics*, 333–371. Cambridge: The McDonald Institute for Archaeological Research.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.
- 松瀬育子. 2015. 「ネワール語における自他動詞対：民話テキストの動詞分類と考察」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 257–274. 東京：くろしお出版.
- 大西秀幸. 2015. 「ラワン語の自他動詞：形態的対応と事象のコード化の面からの考察」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 223–237. 東京：くろしお出版.
- パルデシ プラシャント, 桐生和幸, ナロック ハイコ（編）. 2015. 『有対他動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
- Peterson, David A. 2007. *Applicative Constructions*. Oxford: Oxford University Press.
- Phillips, Audra. 2000. "West-Central Thailand Pwo Karen phonology". *33rd ICSTLL Papers*, 99–110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.
- 白井聡子. 2015. 「ギャロン語ヨチ方言の他動性：自他動詞対からの分析」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 141–157. 東京：くろしお出版.
- Solnit, David. 1997. *Eastern Kayah Li: Grammar, Texts, Glossary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.